

バスク地方のネイション形成と自治の記憶の景観

—ビスカヤ県エンカルタシオネス郡アベジャネダの事例—

石 井 久 生

1. はじめに

スペインとフランスの国境に位置するバスク地方には、固有の言語や文化を共有するバスク人が住む。バスク語話者は減少の一途をたどっていたが、近年の増加は顕著である。こうした現象は少数派言語の復活として世界的にも注目され、石井（2013, 2011, 2008）もバスク語話者集団の活性化を言語空間や言語景観などの観点から検証してきた。バスク地方における固有の言語や独特の文化の存在は、バスク人をして他の集団から際立たせるアイデンティティの指標として認識されている。

しかし、彼らにとってアイデンティティの礎となるのはバスク語やバスク文化だけではない。彼らが共有するもう一つの重要な遺産が「自治の経験」である。中世から近世にかけて、スペイン側のバスク地方 Hegoalde には「フエロ」と呼ばれる固有の地域法体系が存在し、高度な自治が実現されていた¹⁾。フエロは、そもそも相続や刑罰など地域住民の生活に必要な規則で構成された法体系として登場し、後に成文法として編纂された。当時のスペイン王室はこうしたバスク地方の自治体制を「フエロ体制 el régimen foral」と呼び、国家統治体制において特権的な地位に位置づけていた。さらにこうした自治体制は、独特の法体系もさることながら、地域的な多様性にも特徴があった。バスク地方の自治は全体で一つの体制が存在したわけではなく、各地に類似の法体系と自治体制が存在した。そうした地域の代表が、現在のナバラ州 Navarra に相当する旧ナバラ王国、現在のバスク州 Euskadi の3県の前身となるビスカヤ Bizkaia、ギプスコア Gipuzkoa、アラバ Araba の3つの領主国である（位置は図1参照）。これらの地域には、それぞれ固有のフエロと自治体制が

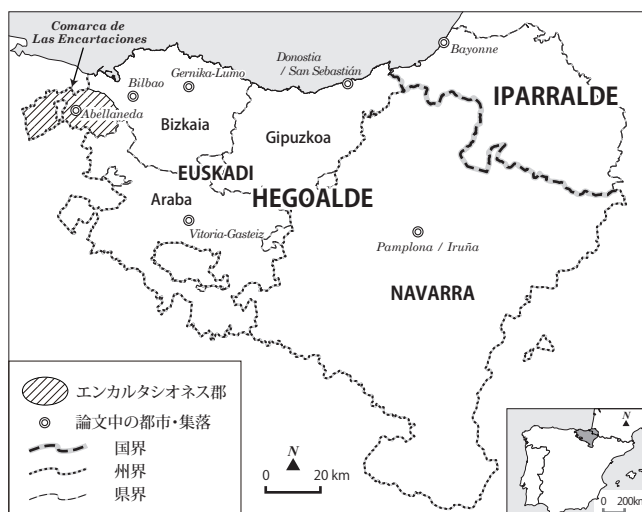


図1 現在のバスク地方とビスカヤ県エンカルタシオネス郡アベジャネダ

存在した。さらに独特なのが、自治体制の重層性であり、上位領域のフエロに対して、その統治下にある下位領域が固有のフエロを持つ場合があった。例えばビスカヤ領主国では、領主国のフエロ代議機関に代表者を送り出す代議区がいくつかに分けられ、そのうち中央から離れた2郡はそれぞれに固有のフエロを持ち郡内の自治を行った。また代議員を送出する権限を与えられたいくつかの都市も固有のフエロを保持した。こうした法体系の存在により、都市や広域統治体は上位の統治体の介入を一定程度防ぎつつ、自治を実践することが可能であった。

こうした各地の自治権は、スペイン中央政府による中央集権化にともない18～19世紀にかけて縮小され、マドリードの王位継承にともなう第三次カルリスタ戦争でバスク各地が支持したカルリスタ側が敗戦したことで1867年に完全に剥奪された。フランス側のバスク地方Iparraldeにおいても状況は同じで、ピレネー山脈北側に存在した中世の封建領ラブルディ、ナファロア・ベヘラ、スベロアは中央権力から離れた辺境にあって自治を実践していたが、フランス革命により歴史的領土が解体され自治権を喪失するとともに、フランスの地方自治体である県に再編成された。スペイン側ではフエロ喪失直後から自治回復を目指すナショナリズム運動が活発化したが、1930年代のスペイン内戦後に成立したフランコ独裁政権はそうした動きを徹底的に弾圧した。そうした状況下でナショナリズム運動は先鋭化し、分離独立を主張する過激集団が登場した。しかし1975年のフランコの死去と1978年の新憲法発布により状況は一転した。同憲法によりスペイン国内各地の地方自治権と固有の言語の権利が保障されたことにより、バスク州とナバラ州ではバスクのネイション再生のための諸政策が推進されるようになった。

バスク州とナバラ州における自治権の復活は、住民らがかつて自治を実践した場所に人々のまなざしを向けることになった。具体的には、かつて自治のための合議が行われた場所の施設が整備され、朽ちていた場合には修復され、自治の歴史を伝えるための展示が実践されるようになり、自治の顕彰の可視化が進行した。本論文では、具体的事例としてバスク州ビスカヤ県のエンカルタシオネス郡Comarca de las Encartacionesをとりあげ、郡における中世から近世の自治の中心地であったアベジャネダ Abellanedaにおける自治の顕彰を「記憶の景観」としてとらえ、地域が経験した自治の記憶を景観論的に明らかにするとともに、バスクのネイション形成における自治の記憶の位相を考察することを試みる²⁾。

2. 記憶の景観

現代におけるバスクのネイション形成において、バスク地方各地における自治の経験がバスク文化の再生と同等の役割を担うのかというテーマを検証するうえで課題となるのが、現代バスク社会において中世の自治の痕跡をどのように扱うかである。自治の根拠となったフエロは法典化されているので、法文を解読することで中世から近世にかけての自治体制を解釈することは可能であるが、それでは過去の体制を検証するにすぎず、現在に至る自治の景

観の顕彰には直接的につながらない。

そこで現代社会を考察する資料として注目したのが、自治を経験した各地において、その経験を場所に刻むかのように存在する、あるいは修復されて現在に蘇る議事堂、記念碑、自治の経験を伝える展示や催事などの顕彰である。こうした顕彰を研究対象とするうえで役立つのが「集合的記憶 collective memory」の考え方である。集合的記憶とは、社会学者アルブヴァクス Halbwachs が1925年に提唱した概念である (Russell 2006, 792)。集団構成員は、集団が共有する様々な経験や伝承をととして過去の出来事を継承し、祝祭や展示などのパフォーマンスをととして過去と現在の記憶の連続性を文化的集団内部で維持する。こうして集団内で継承されてきた記憶は、文字として記録された歴史とは本質的に異なり、それぞれの時代の延長である現代において再構成された生きる歴史である。

集団的記憶は時間の経過をととして継承されるが、その過程で空間や場所とどのように関係するのであろうか。集団は時間的流れの中で経験を積むが、その経験の記憶は時系列に刻まれるだけではない。集団は有限な時間の中で様々な経験を記憶として継承しつつ、同時に集団構成員が活動する有限の空間に活動の痕跡を刻印する。こうして流動的な記憶を永続的で具体的に見せるための空間内での付置、いわゆる「記憶のトポグラフィ」が形成される (若林 2009, 8-9)。

アルブヴァクスの記憶と場所との関係の考え方に従えば、記憶を共有する集団は、実態のある作品、彫像、記念碑、空間内の特定の場所、あるいはシンボルや精神的に支柱となるものなどの物理的現実には固執し、それらと重ね合わせることによって記憶を共有することが可能になる現実を所有する場合に記憶が持続する (Halbwachs 2017 [1941], 204)。このようにして場所に刻印された集団の経験は、彼らの社会的記憶を組み立てるだけでなく、記憶を空間的に再構成するといえる。集合的記憶が付置された空間において、モニュメントなどの有形財や催事など無形財に記憶が表象するのが「記憶の場所」である (Till 2003)。

場所やトポグラフィと集団的記憶の関係が明らかになったところで、地理学と記憶との接点が強固になるが、そうした場所における記憶の表象を記述する方法が問題になる。そこで本研究で試みるのが「記憶の景観 memory of landscape」という景観論的手法である。各地における自治の記憶の表象を「記憶の景観」と定義し、景観の生産や消費に関与する様々な主体やその行為、力学を丹念に記述することにより、各地で進行するバスクのネイション形成における自治の記憶の位相を明らかにすることが可能になるであろう。

集合的記憶を扱う「記憶研究」は、人文社会科学の諸分野が関与する学際研究であるが、近年のこの分野への注目の高まりは、先行研究の急増からもうかがい知れる。研究者集団の組織化も進み、2008年1月には学術誌 *Memorial Studies* が刊行され、地理学分野でも学術誌 *GeoJournal* が同年の73巻3号で Collective Memory 特集号を組んだ。こうした地理学における記憶研究への関心の高まりは、人間集団が経験して共有する過去が、集団の選択による社会的・地理的構築であるという認識が浸透した結果である (Rose-Redwood and Alderman 2008, 161)。

Dwyer and Alderman (2008, 165) は、地理学者が記憶の景観を記述する際に「テキスト」「アリーナ」「パフォーマンス」という3つのメタファーを採用する傾向にあると指摘している。まずテキストについてであるが、記憶の景観をテキストのメタファーとして記述する手法は、Duncan (1990) や Duncan and Duncan (1988) に代表される英語圏の地理学者の間で1980年代末以降に起こった「景観テキスト論」に端を発する。彼らは景観を、特定の社会空間的文脈において作者と読者によって書かれ、書き換えられ、読まれ、消費される意味体系として分析してきた。この考え方によれば記憶の景観は、最初に意味が与えられるだけではなく、社会的に意味づけされた空間において複数の主体が再帰的に関与するため、テキストや間テキストから歴史的言説として読み解くことが可能になる。

次にアリーナのメタファーで注目するのは、記憶の景観をめぐるポリティクスである (Alderman 2002, Basilk 2023)。記憶の景観に関与する諸主体は景観における過去の記憶の表象に対して政治的な議論や活動を展開するが、集团的記憶は過去を異なる形で語ろうとする諸主体間の競合により制限され再構築され再解釈される。この過程で、どの主体が語ろうとする記憶が優勢になるか、どのような記憶を顕彰しようとするのか、その主体が顕彰しようとする対象は何の景観を表象するのか、こうしたことを議論し交渉する場所、それがアリーナである。アリーナにおける主体間の交渉を観察し記述することで、記憶の景観における諸主体間の力学を検証することが可能になるといえる。

地理学者の多くは集团的記憶の顕彰をめぐるテキストや論争を重視するが、Burks (2006) や Vasudevan and Kearney (2016) はパフォーマンスにも注目している。パフォーマンスのメタファーは、見世物、演劇、祝祭、儀式、パレードなどのほか、抗議活動なども含めて、記憶の景観が表象する場所が様々な表現活動のパフォーマンスの舞台として機能する仕組みに注目する。場所に刻まれた記憶が社会通念的に正しいかを人々が確認し、あるいは異議を唱えることは、集合的記憶と場所のつながりを強化することに貢献する。記憶の顕彰はそれを当初生産した主体の関心を反映するが、それを消費する観衆によるパフォーマンスがなければ顕彰は沈黙してしまう。顕彰を過去から未来へと引き継ぎ、集团的記憶に命を吹き込み続けるのがパフォーマンスである。

テキスト、アリーナ、パフォーマンスは、記憶の景観を記述するうえで重要なメタファーになるが、記憶の場所としての研究対象地域の選考も重要である。バスク地方において自治の顕彰と場所の強固なつながりが確認できる代表例が、バスク州ビスカヤ県のゲルニカである。ゲルニカはビスカヤ県の地方都市であるが、スペイン内戦中の1937年に国民戦線側のフランコ総司令官の要請を受けたドイツ空軍により空爆を受け、それをテーマに画家ピカソが大作『ゲルニカ』を作成したことで、この都市の名は世界的に知られる。こうした事情から、Cava (1996) や Inal (2020) に代表されるように、爆撃の記憶に焦点を当てた先行研究が多いのは当然であるが、その一方でゲルニカはバスク地方の自治の象徴的な場所であり、自治の記憶に焦点を当てた研究もある。その代表例として、Renato and Watson (2000) は、タイトルにバスク語地名 Gernika とスペイン語地名 Guernica を併記したうえで、ゲル

ニカが中世ビスカヤ領主国の自治の中心地で、合議の場にオークの巨木があり、それが後々「ゲルニカの木」と呼ばれるバスクの自治の象徴になったこと、さらにそこに自治の合議を行う最高評議会の議場が設けられたこと、その場所が19世紀までスペイン中央政府との間で自治をめぐる交渉の舞台になったこと、そうした自治のシンボルの場所であったことから空爆の標的になったこと、といったこの場所に刻まれた記憶を連綿と説明したうえで、場所の記憶をめぐる諸主体の交渉がもたらすのが対立なのか調和なのかを検証している。

ゲルニカは、空爆、自治といった記憶が表象する場所であるが、そこを政治的中心地としたビスカヤ領主国のもとにおいて、独自の自治を実践していた下位領域が2つある。一つが同領主国東部のドウランゴ郡 Merindad de Duranguesado、もう一つが同西部のエンカルタシオネス郡 Merindad de las Encartaciones である（図2）。これらの場所は、ゲルニカを政治的中心地とするビスカヤ領主国に含まれるものの、同領主国の統治下にありながら当時の

「郡」という広域に適用される地域固有のフエロを持ち、独自の自治を実践してきた。こうした自治の経験を景観論的に記述することで、ゲルニカとは異なる自治の景観を描写することが可能であろう。今回は、エンカルタシオネス郡の自治の中心地であったアベジャネダに注目し、この場所における自治の顕彰を、記憶の景観として表現することを試みる。

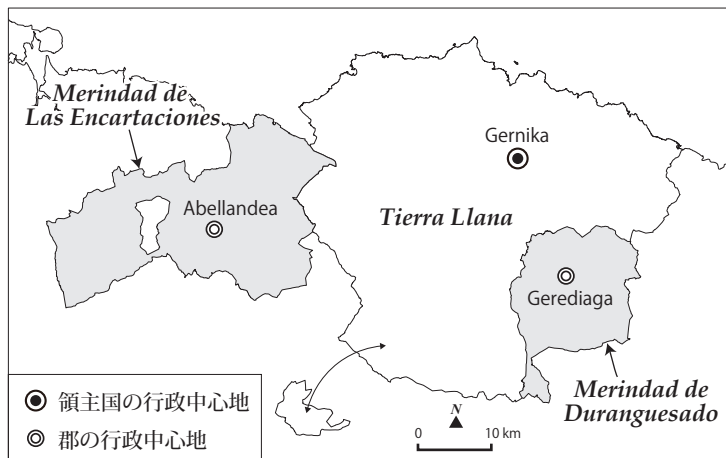


図2 ビスカヤ領主国の行政地域（1500年頃）

備考：地域名は現在の公式名称ではなく、当時のカスティーリャ語表記とした。

出典：Pérez（2008）、Arizaga and Martínez（2008）などにより作成。

3. アベジャネダにおける自治と地域の記憶

アベジャネダ議事堂は、現在は博物館として、エンカルタシオネス郡の歴史を展示する場所になっている。評議会にまつわる記憶をこれから記述するが、歴史的文書は Bañales García（2022）に原典も含めて詳しくまとめられているので、それに基づき記憶の景観を記述する。今後特段の明示がない場合は、Bañales García（2022）の内容に従うものとする。

中世から近代にかけて、アベジャネダはエンカルタシオネス郡の政治的中心地であった。エンカルタシオネス郡は上位の行政領域であるビスカヤ領主国に帰属していた。ここではこれら3者の関係を歴史的経緯に沿いながら解説する。

8世紀ごろのイベリア半島は広い領域がムスリムの支配下にあったが、それを免れた半島北部に複数のキリスト教王国が成立し、レコンキスタを進めながら離合集散を繰り返した。バスク地方の東部にはパンプローナ王国が成立し、バスク地方西部への勢力拡張を試みたアストゥリアス王国、後にカスティーリャ王国とたびたび衝突した。それら強国の緩衝地帯に成立したのが、現在のビスカヤ県、ギプスコア県、アラバ県の母体となる各領主国であった。ビスカヤの名称が初めて登場するのは、900年に編纂されたアフフォンソ3世年代記だとされるが、その中でアフフォンソ1世（在位739-757）の遠征についての言及で、現在の地名でいうビスカヤ、オルドゥニャ、ソプエルタとカランツァが登場する（González 2008, 204-5）。これらのうちビスカヤは後のビスカヤ領主国の中心領域となるティエラ・ジャナ Tierra Llanaに相当し、ソプエルタとカランツァは後のエンカルタシオネス郡の一部に該当する³⁾。こうした記述から、8世紀中ごろのエンカルタシオネスは単体の領域としては認識されていなかったといえる（Arízaga and Martínez 2008, 160）。

ビスカヤ領主国の成立は1076年とされる。同年、この地域を支配していたパンプローナ王国（後のナバラ王国）の王サンチョ4世が殺害され、領土がアラゴンやレオンの王により分割された際に、領土の一部を当時のビスカヤ領主が引き継ぎ、ビスカヤ領主国が成立した。ビスカヤ領主国の領土は当初ティエラ・ジャナに限定されたが、徐々に拡張した。1212年のカスティーリャ王国とナバラ王国との戦いで、ビスカヤ領主国はカスティーリャ側を援護し、その見返りに当時カスティーリャ王国領だったドゥランゴ郡の割譲を受け、この結果ドゥランゴ郡はビスカヤ領主国の一部になった。エンカルタシオネスの場合、領域内に複数の有力家と彼らの領地が存在したために、状況が異なった⁴⁾。それでも、この地域が海岸と内陸カスティーリャ王国の要衝を結ぶ地政学的に重要な位置を占め、両地域間の主要な交易ルートになったこと、この地域の経済的重要性からナバラ王国やカスティーリャ王国が地域内の修道院や司教区に特権を与えたこと、などの理由で徐々に地域の統一性を高めていった（Arízaga and Martínez 2008, 206-8）。そして1175年、アルフォンソ3世についての記述の中で、はじめてエンカルタシオネスに対応するラテン語地名 Incartationis が登場する（González 2008, 210）。その当時のエンカルタシオネス内の有力家とその領土は、カスティーリャ王国の影響下にあったが、徐々にビスカヤ領主国の統治下に収まり、最後に都市バルマセダが傘下に入ったのが13世紀末であった（Arízaga and Martínez 2008, 165）。こうしてエンカルタシオネスはビスカヤ領主国を構成する郡に位置づけられるようになった。

ビスカヤ領主国は1370年にカスティーリャ王国に併合された。しかしカスティーリャ王国の統治下に組み込まれた後も、ビスカヤ領主国は地域慣習法フエロの存続が認められた。これは領主国の住民側からすれば、統治者による受け入れがたい命令などに対抗する手段にもなった。フエロは、バレンシアやレオンなど中世のイベリア半島の各地に存在した。当時のカスティーリャ王室は王国内の諸封建領におけるフエロ存続を認め国内を緩やかに支配した。慣習法から始まったフエロであるが、その後バスク諸地域のフエロには国税や徴兵義務の免除のほか、独自の徴税権など高度な自治を実現するための条項が組み込まれた。これに

よりバスク諸地域は、カスティーリャ王国の支配下にありながら高度な政治的自治を実現することができた。

ビスカヤ領主国のフエロは特に有名であった。領主国の自治をフエロに則り執行する立法行政機関は「最高評議会 (Juntas Generales)」と呼ばれたが、その原点は1053年にナバラ王国統治下でビスカヤ領主により開催された評議会にある (Orella 1989, 152)。その後も領主国の決まり事を決定する評議会が頻繁に開催されたが、フエロが法典化したのは1342年、評議会がゲルニカ議事堂で恒常的に開催されるようになったのは15世紀以降であった。そこはもともと Gernikazarra (「古いゲルニカ」の意) と呼ばれ、礼拝堂近くにオークの木があり、ゲルニカ住民がその木の下に集まり地域の決まり事を決めていた場所であったが、後に評議会が恒常的に開催されるようになったことでビスカヤの政治的中心地となった。

ゲルニカ最高評議会の代議員は、ビスカヤ領主国内各地の代表者により構成されたが、そのなかでエンカルタシオネス郡は行政上の特別な地位が保障された。それは当時のゲルニカ最高評議会の議席構成から理解できる。16世紀頃の最高評議会における議席は、ビスカヤの核心地域ティエラ・ジャナ Tierra Llanaを構成する72の教区がそれぞれ1議席、21の都市 (ciudad と villa) が各1議席所持していたが、他にエンカルタシオネス郡が2議席、ドゥランゴ郡が7議席という構成であった⁵⁾。ドゥランゴ郡とエンカルタシオネス郡は、かつてナバラ王国やカスティーリャ王国など他国の直接支配を経験した後にビスカヤ領主国に編入されたという歴史的経緯から、郡の代表者が参加する権限が与えられた。ゲルニカ最高評議会における議席数自体は少なかったものの、ビスカヤ編入以前から地域固有のフエロが存在したことから、郡内に独自の評議会の設置が認められ独自の自治を行うことができたことに最大の特徴があった。

エンカルタシオネス郡を構成した複数の封土や都市は、それぞれにフエロを保持していたが、それはバスク地方内の各封土も同様であり、そうしたフエロが各地で各様に発展したのかどうかについては議論の余地がある。これについて Barrero (2008) や Arízaga and Martínez (2008) は、バスク地方の南、現在のリオハ県の県都であるログローニョにおいて、1095年にアルフォンソ6世が同都市に承認したフエロが規範となり、周辺地域に波及したと唱えている⁶⁾。ログローニョのフエロは、ナバラ王国内のハカやエステージャのフエロを拡充したもので、当時の自治憲章としては一種の理想形であり、1150年ごろまでにラテン語で成文化され、12世紀末から13世紀初めにかけて現在のリオハ地方各地のフエロに、さらに13世紀半ばから14世紀にかけてビスカヤ各地のフエロに影響を与えた (Barerro 2008, 117)。こうして一つのモデルをベースとして各地にフエロが浸透し、それに続いてビスカヤ領主国、エンカルタシオネス郡、ドゥランゴ郡などにおいてフエロの編纂が進んだ (Barerro 2008, 138-9)。

ビスカヤ領主国において自治に関するフエロが編纂されたのは1342年、刑法に関するフエロの編纂が1395年であったが、エンカルタシオネス郡の自治体制もほぼ同じころに確立された。エンカルタシオネスには14世紀以前から他のバスク地方諸地域と同様に域内集落

の代表者が集まり地域の決まり事を合議する習慣があったが、ゴンサロ・モロ Gonzalo Moro 審議官が議長となりエンカルタシオネスのフエロ草案が審議され42条からなるフエロが編纂されたのが1394年で、その場所がアベジャネダであった（Barerro 2008, 139）。これがアベジャネダ評議会の始まりであった。その当時は神聖な場所と認識されていたオークの木の下で合議を行うのが地域の習わしであり、アベジャネダの評議会もオークの下で行われていたと推測されるが、そうした歴史的記録はない。その後この場所は1806年にアベジャネダ評議会の機能が停止するまでエンカルタシオネスの自治の中心地であり続けた⁷⁾。

4. 記憶の景観としてのアベジャネダ議事堂とアベジャネダの塔

19世紀初めまでアベジャネダ評議会が開催されていた場所には、現在でも自治の記憶を継承する建造物群が立地する。その中心となるのが、かつて評議会が開催されていた石造りの塔であり、現在は「エンカルタシオネス博物館」として利用されている（写真1）。その北西に隣接して、当時エンカルタシオネス郡の行政を管轄した地方行政官 Casa del Teniente del Corregidor の公邸が立地する。さらに塔の西側に対面して、評議会参加者用の宿泊施設（現在はホテルとして利用）が立地している（写真2）。宿泊施設の場所には、それ以前はアンヘル・クストディオ礼拝堂が立地していたとされる。地域の自治の記憶を顕彰する建造物群はどのように登場して現在に至ったのだろうか。以下、その過程を解説する。

アベジャネダにおいてエンカルタシオネス郡のフエロの合議を執り行うようになったのは、同地域のフエロの法典化と同じ年の1394年であった。しかし、それ以前から住民の集會がこの付近で行われていた可能性が高い⁸⁾。集會の様子が確認できる最初の記録は1406年であり、González（1996, 10）は当時の集會の開催場所について、「アベジャネダの塔に面した丘のふもとの東斜面」という記述があることから、現在のエンカルタシオネス博物館が立地する東側の平坦地であったと推測している。



写真1

現在のエンカルタシオネス博物館（手前）と地方行政官邸宅（左奥）
（2022年9月筆者撮影）



写真2

かつての代議員宿泊所、現在はホテル
（2022年9月著者撮影）

ここで一つ関心を惹くのが塔の存在である。現在のエンカルタシオネス博物館も、石造りの塔の建造物が展示施設になっている。しかしバスク地方では、立方体の石造りの建築は一般的ではなく、農村地域の典型的建築は切妻屋根と3層構造からなるカセリオと呼ばれる荘宅である。現在の博物館の中心構造物として存在する塔が、初期の集会時から存在した理由は何だったのであろうか。

実はアベジャネダを含むビスカヤ県は、バスク地方では珍しく中世起源の石造りの塔建築が多くみられる地域である。城塞としての塔のほかにも、「塔の家 casa-torre」と呼ばれる塔に住宅を併設した邸宅も多数存在する。こうした石造塔建築は、ビスカヤ県東部のエンカルタシオネス郡への集中が著しく、ビスカヤ県に現存する170の塔のうち、135はエンカルタシオネス郡に集中している (Goicoechea 2015, 124-137)。これらの塔の起源について González (2004) や Goicoechea (2015) が詳しく記述しているので、それに従ってこの地域における塔の歴史を解説しよう。

13世紀、塔に代表される軍事目的の建造物はこの地域では一般的でなかった。当時の有力家は所有する大土地に邸宅を構えて居住していたが、農村地域まで収める有力家は少なかった。しかし14世紀に入ると、カスティーリャ王家の継承戦争、ビスカヤ領主の権力の弱体化などの政治的不安により、バスク地方西部から、西のカンタブリア地方にかけての地域では有力家間の抗争が激しくなった。さらに14世紀中ごろのペストの流行と飢餓により農村地域では人口が減少し、その結果、権力の空白が生じた土地や集落をめぐる有力家間の抗争が激しくなり、それに新興の有力家も加わって、「パンデリソスの戦い」と呼ばれる内乱状態が生じた⁹⁾。軍事目的の石造塔が集中的に建設されたのは14世紀前半とされ、この時期の有力家は所有地の目印と軍事拠点・監視施設として塔を積極的に建設した。

立方体の塔の形態をとる軍事要塞が建設された背景として、Goicoechea (2015, 109-116) はノルマン人の影響を指摘している。ノルマン人は8世紀から9世紀にかけて北西ヨーロッパから地中海にかけて進出し、各地の建築様式に影響を与えた。特に、ノルマン人の影響の強かったノルマンディー公国、フランク王国、イングランド王国などでは、ノルマン人の様式を取り入れた立方体や円筒形の砦が防衛の要衝に多数建設された。ちょうど当時は西ヨーロッパで封建制度が発達し、封建領主が城郭を活発に建設していた時期であり、イングランド王国やカスティーリャ王国の封建領主はノルマン人の様式を取り入れた立方体を基調とした城郭を建設した。そうして造られた城郭は、防衛機能のほかに王族の居住機能も兼ね備えた大規模な建造物になった。それに対して、エンカルタシオネス郡の塔は、内乱状態に対応することを目的として有力家が防衛のために領土の前線に建設したことから、石造りの強固な立方体の塔のみが目立つ建造物になった¹⁰⁾。エンカルタシオネス郡において14世紀に建設された塔は、建設した有力家の歴史により形態が異なる。例えば、13世紀以前からの歴史を有する有力家の場合、邸宅の横、あるいは上部に塔を増築した。しかし14世紀に領土を獲得して興った新たな有力家は、邸宅を所有していなかったために、居住目的の邸宅と防衛目的の塔にそれぞれ独立して建設した。アベジャネダの塔は後者に該当した¹¹⁾ (Goicoechea

2015, 144)。

当時のエンカルタシオネスにこうした有力家が多数存在し、バンデリスの戦いが激化した背景には、この地域に伝統的に鉄鋼業が存在したことがある。バスク地方を中心とするイベリア半島北部のカンタブリア海沿岸地域は、昔から鉄鉱石が産出され鉄鋼業が盛んな地域であった。バンデリスの戦いが続いた15世紀、エンカルタシオネス郡には製鉄所を所有する有力家が多数存在したうえ、鉄鋼生産に直接にかかわらずとも鉄鋼製品の販売に関与する有力家も存在し、鉄鉱石の採掘から、鉄鋼の生産、販売をめぐる有力家間の複雑な関係が存在した (Dacosta 1997)。鉄鋼業に関与する有力家は、富を蓄えるとともに、金銭の貸借、鉄鉱石産地や燃料の薪炭の確保、労働者の確保などで緊張関係にあり、それらをめぐる争いが絶えなかったとされる。こうした緊張関係から、バンデリスの戦いが始まった14世紀前半に防衛と警備を目的とした石造りの塔が盛んに建設された。しかし新たな塔の建設は14世紀末に急速に収まり、15世紀初めには新たな塔の建設はほとんど見られなくなった¹²⁾ (Goicoechea 2015, 144)。

現在のエンカルタシオネス博物館に利用されている石造りの塔の建物の原点は、14世紀に建設された塔にあり、その塔の付近で評議会が開催されたことが確認できる最も古い記録は1406年である。その頃の評議会の構成員は定かでないものの、1406年の記録には近隣地域から120名以上が参加したとある (González 1996, 10)。これは後の評議会構成員の規模に比べはるかに大きいことから、地域の代表者というよりも、各地の有力家が集合していたと推測される。

15世紀末にはカスティーリャ王権が安定し、バスク地方におけるバンデリスの戦いも収束に向かった。この頃

がこの地域の近世のはじまりといえるのであろうが、同時期に評議会も有力家の集会から地域を代表して投票権を持つ代議員が出席する議会へと変質していった。そして最終的にアベジャネダ評議会は、10地域の代議員で構成されるようになった¹³⁾ (図3)。ちょうどこのころ、フエロの改革が進められ、地方審議官フランシスコ・ペレス

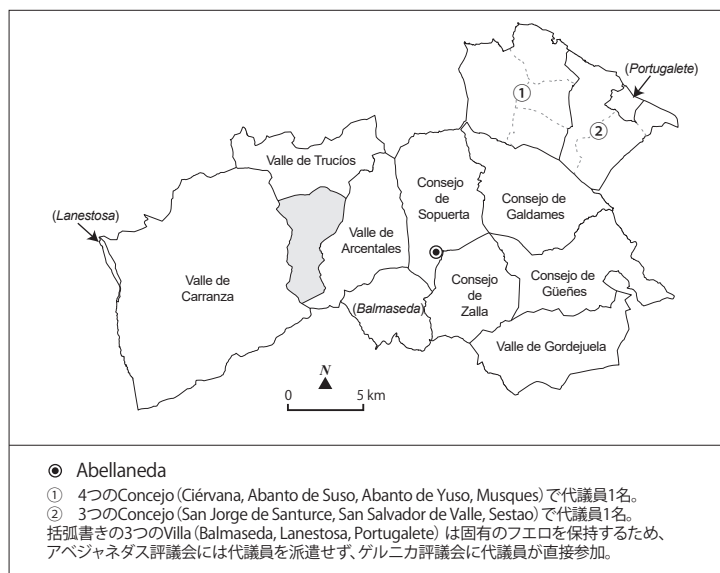


図3 アベジャネダ評議会の代議員送出地域単位 (1600年頃)

出典: Arizaga and Martínez (2008)、Martínez Rueda (2008) などにより作成。

Francisco Pérez Vargasのもと112条からなる新フエロが1503年に成立した。こうした議会制度と法体系の近代化にともない、評議会参加者が地域の代議員に限定されたことにより、評議会を建物内で開催することが可能になった。

5. 記憶の景観の退廃と再生

エンカルタシオネスにおける自治の記憶の起源がアベジャネダ評議会発足の14世紀末にあることは確かであるが、1406年の会議が塔の近くで開催されたという記録はあるものの、会議のためのどのような施設が当時そこにあったのかについて歴史的証拠が乏しい。1535年に罪人収容施設、いわゆる監獄がそこに存在していた記述が残る程度である。16世紀には監獄の入る建物の改修についての記述が何度も登場し、その一つに「ホールに上がる階段の床」の改修についての言及があることから、評議会の集会場が監獄の上部にあった可能性が高い (González 1996, 10)。こうしたことから評議会は2層から成る建造物内で開催されていたようである。しかし、当時の集会場は小規模だったようで、1592年に新しい会議施設の建設が始まる。この会議施設は、現在のエンカルタシオネス博物館の西外壁に掲げられている郡の紋章に、その建物が完成して紋章が掲げられたのが1635年であると記されていることから、同年までには完成している。この施設は、現在の塔が立つ場所に建設されたと推測されている。その後、1567年には地方行政官公邸 (1750年改築)、1771年には礼拝所跡地に評議会議員宿舎が建設され、現在の建造物群の構成がほぼ完成している。また1771年には、塔に併設して監獄とその調理場が入る小屋が建設され、監獄の機能はそこに移されるが、その小屋は20世紀には学校として利用されることになる (Martínez 1996, 81)。

建造物群の整備が進行した18世紀は、エンカルタシオネス郡の自治の危機でもあった。アベジャネダ評議会によるエンカルタシオネス郡の自治と、ゲルニカ最高評議会によるビスカヤ領主国の自治が並行して行われたことは、両自治体の法治と財政における二重行政を意味する。そのため18世紀には主に予算面で両者の対立が深刻化した (Martínez 2008, 239-247)。エンカルタシオネス郡内の各地域もこの点で決して一枚岩ではなく、18世紀後半にはアベジャネダ評議会を離脱してゲルニカ最高評議会に直接参加する地域が現れるようになり、1800年にはアベジャネダ評議会の全代表がゲルニカ評議会に参加するようになった。そして1806年12月18日の王令でアベジャネダ評議会を構成していた10地域全てがビスカヤ領主国に併合されることになり、評議会は約400年の歴史に幕を閉じた (Martínez 2008, 239-247)。評議会廃止により評議会に関係する諸施設は放棄された。これにより19世紀の建造物群は、いくつかの先行研究が歴史家デルマス Delmasの1864年の記述を引用して「廃墟の山」 (Olascoaga 1909, 58 ; Gonzáles 2006, 16 など) と表現するように、退廃化が進行した¹⁴⁾。

退廃化が進行するなか、それを憂慮して建造物群の修復を試みる動きが19世紀末に興った。そのさきがけが、1899年にバルマセダ市議会の当時の副議長がアベジャネダの塔と地

方行政官宅の修復を求める書簡をビスカヤ県議会に送ったことであった。これにより修復委員会が結成され、これ以降、県主体で修復が進行することになる。

19世紀が記憶の景観退廃の時代だとすれば、20世紀はその再生の時代といえる。1899年に開始された修復はビスカヤ県の管轄下、複数の建築家により主導された。特に1931年から修復の指揮を執ったディエゴ・バステラ Diego Basterraにより塔の内装の改修が進んだ。県は改修された塔の建物を利用して1934年7月26日に現在の博物館の前身である「エンカルタシオネス博物館」を開館した。これはバスク地方で最も古い博物館の一つに位置づけられる¹⁵⁾。当時は、教会や修道院からの寄贈品などの宗教的展示や地元有志から提供された物品の展示が主であったが、アベジャネダの自治の記憶の顕彰が、展示というパフォーマンスの場所としての性格を備えるようになった出来事であった。

記憶を継承する博物館としての機能をあわせもつようになった建造物群に現在に至る構造を与えたのが、1942年から1953年にかけて修復プロジェクトを率いた建築家エウヘニオ・アギナガ Eugenio María de Aguinagaであった¹⁶⁾。アギナガの修復プランの主目的は、「アベジャネダの建造物群を構成する建物を統一し、かつての尊厳と荘厳さを与える」(Muños 1991, 8) ことにあった。ただしアギナガは、従来の景観を忠実に再現する手法は取らず、他の建物の修復や当時の美意識などから学んだ知識を修復過程に取り込んだ。具体的には、議事堂の入る塔と隣接する地方行政官宅を吹き抜け通路連結し回遊性を高めたうえで、集会場の壁のローマ式半円アーチをともなう大窓、塔2階部分の広いテラス、塔内の螺旋階段など、中世から近世にこの地域には存在しなかったであろう構造物を加えていった。そして最大の改装が、2層構造だった塔を1層増築して3層にしたことであった。この改修について González (2006, 16) は、富裕層の大邸宅が多く残る沿岸部のゲチョ Getxo 地域の住宅の修復にアギナガが携わった際に、3層から成る邸宅から彼が得たインスピレーションが反映されているとしている。古い構造を忠実に再現することよりも、地域の記憶を大胆に表象することにこだわったデザインに対して、歴史家の González (2006, 18) は「絵画的、刺激的、浪漫主義的な結末」だとして賛美しながらも批判を込めて評価しているが、この地域の象徴となる記念碑的建造物であるとする意見も多く、新たに出現した新古典主義的モニュメントをめぐる議論が活発化した (Martínez 1996, 89 など)。この修復は1953年に終了したが、博物館としての公開は延期され、1968年に「アベジャネダ議事堂博物館」として展示を再開している。

最近の改築で現在の外観が完成するのは1989年であった。この改修では塔の正面玄関にガラス張りのドームが取り付けられたが、改修の主目的は建物内部の展示やオフィスのためのスペースの充実にあった。こうして博物館は、名称を「エンカルタシオネス博物館」に再び戻したうえで、1994年に再開された。

6. 自治の記憶から地域の記憶へ

現在のエンカルタシオネス博物館は、地域の歴史と暮らしを展示する典型的な地域博物館である¹⁷⁾。20世紀末の改修により加えられたポストモダンなガラスドームのファサード(写真3)が入り口となり、入館後すぐのホールには、エンカルタシオネス郡の巨大な地域地形模型が配置されている。そこから塔の3階まで続く10の展示室には、先史時代から近世までの人々の歴史を追体験できる地図、絵画、過去を再現した模型、遺物の実物などが体系的に配置されている¹⁸⁾(写真4)。常設展のほかに地域の歴史、産業、人物についての特別展も頻繁に開催されている。さらに、地域の生活や歴史を体験する教育活動、巡検なども実施されている。

前述のように、塔の建造物が博物館として利用されるようになったのは1934年であり、当時「エンカルタシオネス博物館」と呼ばれたこの施設には、県が保管していた地域の宗教遺品、地元住民(主に資産家)から提供された品々が展示されていた。当時の博物館は、19世紀ごろからスペイン各地に登場した地方自治体主導の「地方博物館」としての性格が強かった。その後1943年に始まったアギナガによる大改修を経て、中世の建造物としての風貌が強調されることでモニュメント性が高められた塔は、1968年に「アベジャネダ議事堂博物館」として再登場した。当時の博物館では、地域の歴史にまつわる資料が展示されていたが、その特徴をAntoñanzas(1996, 32)は「厳密さと説明の欠如」と表現している。塔の1階正門から入場して最初の展示室には、先史時代から近世までの歴史的資料の複製品が配置され、隣接する展示室には中世から近世の武器や旗の複製品が、塔の2階展示室には当館文書室が保管する地域の歴史を記述した文書資料のレプリカが展示されていたが、それらの展示に説明の一貫性がなく、さらにそれを解説できる学芸員もいなかった(Antoñanzas 1996, 32)。それに対して1994年に再開した現在の博物館は、名称を「エンカルタシオネス博物館」とし、地域の展示・教育・研究を目的として地域の人々の経験を体系的に網羅した「地域博物館」としての特徴を備えている。このように地域の自治を象徴するアベジャネダ



写真3
最近の改修で加えられたガラスドーム
のファサード
(2023年9月著者撮影)



写真4
アベジャネダ評議会にまつわる展示
(2023年12月著者撮影)

の塔は、1930年代以降博物館の展示施設として生まれ変わるが、時系列的に、地方博物館から地域博物館へと性格を変えている。

本稿に登場する「地方博物館」と「地域博物館」という類似した用語について、これらはしばしば混同して使用されるが、本稿では次のように使い分ける。「地方博物館」は地方自治体が管理運営する博物館が該当する。地方博物館は、ヨーロッパにおいて近世末から近代にかけて、特に19世紀ごろから盛んに創設されるようになった（Brown and Mairesse 2018, 528）。当時、有産階級が所蔵品を地元へ寄贈する動きが目立つようになり、そうした品々を収容する施設を地方自治体や資産家を中心になって各地に創設した。博物館の設立と展示の主体が地方自治体であることから、本稿では「地方博物館」と呼んでいる。スペインにおいて地方博物館の創設が顕著になったのは、1835年のメンディサバル法、いわゆる永代所有財産解放令 *Desamortización* がきっかけである。同法により教会、修道院、貴族などが所有していた土地や財産が没収されたことで、それらが所蔵していた品々を保管する場所の必要性が生じたことから、自治体主導で各地に地方博物館が設立されるようになったとされる（Alaminos 1996, 126）。こうした動きは19世紀にカタルーニャ文芸復興運動が進行し地域主義運動も活発だったカタルーニャで特に顕著で、19世紀後半に数々の地方博物館・地方美術館が同地域に登場した。バスク地方においても、ビスカヤ県庁とビルバオ市役所がビルバオ美術館の建設を主導し、1914年に開館している。エンカルタシオネス博物館も、地域の宗教関連施設や有力者から寄贈された品々の展示から始まっており、開館当初は当時の典型的な地方博物館であったといえる。

これに対して「地域博物館」は、武井（2020）が英訳として *community museum* を充てている地域博物館の考え方に近い。ここでいう地域博物館は、博物館が特定の人々との間に構築を望む特定のつながりを強調するために登場した形態である。地理的な集団、すなわち地域コミュニティとの関係を強調したのが「地域博物館」であるといえる。現在のエンカルタシオネス博物館は、運営主体が地方自治体のビスカヤ県であることから地方博物館としての性格も併せ持つが、地域と密着した地域博物館としての特徴が強い。それについて、ビルバオ美術館の学芸員でエンカルタシオネス博物館の展示にも関わった Antónanzas（1996, 38-40）は、10の展示室における史料が「それぞれの時代の社会生活、精神世界に私たちを近づけるよう、厳密な基準に基づいて配置」されており、この博物館が「地域住民にとっての出会い、楽しみ、知識の場として、エンカルタシオネスの過去と現在の生活について発見したい、詳しく学びたいと思うすべての人にとって必須の参照点」となることを望む、と記している。

最近の改修で地域博物館としての性格を強めた背景には、前述のように、旧博物館における地域の歴史の展示に体系性が欠如していたことに対する反省がある。1964年から1985年にゲルニカ議事堂の修復に携わったビスカヤ県文化局遺産課が、「アベジャネダの自治の中心地としての歴史的存在感を回復」し、「エンカルタシオネスの歴史的遺産、歴史的場所としての価値の伝道師としての性格を議事堂に与え、議事堂をエンカルタシオネスの歴史を紹

介する空間に変える」ことを目標に掲げ、アベジャネダ議事堂の修復計画を立案し、実行に移したのである (Antoñanzas 1996, 32-34)。このように、地方博物館から地域博物館への移行を推進した主体は、実は博物館を運営する自治体やその方針に賛同する学芸員らだったのである。その一方で、1985年までに修復されたゲルニカ議事堂では、議事堂併設の展示室において自治の歴史が展示されているが、その内容は自治の歴史に特化したテーマ展示である (写真5・6)。この点、地域の歴史を総合的に展示することで、自治の記憶をその一部として取り込み、地域コミュニティとの一体感を強調するエンカルタシオネス博物館との対比が興味深い。

地域博物館としての特徴に立ち返れば、現在の博物館は、エンカルタシオネス郡という空間的枠組みにおいて地域と人々が経験してきた記憶を博物館に適した資料へと変換して展示しているといえる。そうした行為をICOMは「博物館化 musealisation」と表現している。これが狭義に意味するのは、博物館に収めること、広義に捉えれば、生活の核心、例えば人類の活動または自然の景観というようなものを博物館に適するものへと変換することである (Desvallées and Mairesse 2010=2010, 57)。そこから、物質や場所を保持することを重視する意味での「遺産化 heritagization」に通じところがある。このようにして場所に刻まれた記憶は、記憶のトポロジーに付置され、記憶の景観が生産されるのである。こうした意味では、エンカルタシオネス博物館の事例は、地域の記憶を継承する事物や場所を保持しようとする「地域の博物館化」の成果ととらえることができよう。

しかし同時に Desvallées and Mairesse (2010=2010, 58) は、同じく「博物館化」を意味する用語として museumification の存在を指摘し、「世界の博物館化 museumification は、生命世界を化石化 (あるいはミイラ化) するという軽蔑的な意味において理解されている」として、この用語に対して批判的立場をとっている。この用語の起源は地理学者エドワード・レルフにあり、この場合の博物館化は歴史の保存と再建の理想化の意味を含んでいる (Relph 1976=1991)。博物館化された場所では、それぞれの場所が経験してきた歴史の個別



写真5

ビスカヤ領主国の最高評議会会場だったゲルニカ議事堂

備考：現在もビスカヤ評議会議事堂として利用されている

(2022年9月著者撮影)



写真6

ゲルニカ議事堂内展示室のビスカヤの自治の展示

(2023年12月著者撮影)

性は重視されず、郷愁を誘う画一的で浪漫主義的なイメージに修正され、個別の場所とのつながりの弱い記憶として私たちの前に提示される (Relph 1976=1991: 171-172)。こうした場所は、高度に発達した消費社会においてみられ、そこでの経験は内部の人間が体験する場所と結びついた豊かで本物のものではなく、外部の観光客らが体験するような客観的で表面的な偽物の経験に変質する。人の経験との関係が希薄な無機質な場所を生み出すのが、大量消費社会の抽象的空間、いわゆるポストモダンの消費空間であり、そういった空間では人々の経験は理想化して語られ、あたりさわりのない内容に変質し、場所は個性を喪失する。こうした現象をレルフは「没場所性placelessness」と呼んだ (Relph 1976=1991: 157)。場所の個性の消失が地理的環境において極端に進行した様子をレルフは「ディズニー化desnification」と表現し、歴史的環境における同様の現象を「博物館化」とした。

レルフの「博物館化」はエンカルタシオネス博物館にも影を落とす。ビスカヤ評議会が1991年に発効した最近の修復に関する計画書の中に、「1942年から1953年の改修は確固たる論理で進められたが、その論理は折衷的なもの」であり、「古典的で絵画的な建物のイメージは、それそのものの尊厳と優雅さによるものではなく、暗示的でロマン主義的なビジョンによって与えられる」もので、「端的に言えば小さなディズニーランド una pequeña disneylandiaである」とする批判的記述がある。これは明らかに20世紀半ばのアギナガの大改修を指す。アギナガは、塔のモニュメントとしての内外観を強調するために、ローマ式の半円形アーチを取り込んだ大窓、広いテラス、螺旋階段など、中世のエンカルタシオネスには存在しなかった構造を加えたうえ、2層建ての塔を3層に改修した。こうした修復は、20世紀前半にビスカヤ県で盛んだったネオバスク様式建築運動に由来するものであろう。ネオバスク様式は、20世紀前半の政治的なバスク地域主義運動と連動して登場した建築様式である。当時の富裕層はバスクの農村で典型的な荘宅カセリオに模した巨大な住宅を建造したが、それにバロック様式や新古典主義などを参照しつつ、塔、ローマ式アーチの玄関や大窓を取り込んだのがネオバスク様式である (Gómez 2003)。当時流行の建築様式の取り込みは、結果として議事堂の経験の時間的枠組みを超越した新古典主義様式の取り込みへとつながり、地理的環境における無個性化を促した。こうした状況をビスカヤ評議会が「小さなディズニーランド」と揶揄したのである。

博物館においてコンテンツが展示される容れ物または場所として理解される展示exhibitionは、博物館という用語自体が機能と建物の両方を意味するように、この空間の建築によってではなくその場所自体によって特徴付けられる (Desvallées and Mairesse 2010=2010, 38)。しかし、展示施設establishment自体が展示されるコンテンツとしての価値を持つアベジャネダ博物館の場合、それ自体が展示の対象となる。そうした場合、場所の記憶を顕彰する歴史的建造物をそれぞれの時代の解釈を加えながら修復することについて、どのように評価すればよいのであろうか。歴史的建造物の改修については、ヴェネツィア憲章のような世界的基準が1961年に定められているものの、カルカソヌのヴィオレ・ル・デュクによる改修をはじめ現在に至るまで論争が絶えない。これについて、場所との関係で

考察する一助になるのが、次のような考え方であろう。福田は、地域に根差したエコミュージアムについて、1960から1970年代のフランスにおいて地域コミュニティの活動として誕生し育まれてきた思想が日本や世界各地に受容されたことに注目し、「地域に主眼を置いた運動でありながら、その思想がグローバルなレベルで流布し影響を与えている」として、地域をローカルな枠組みだけではなく、より広い関係性の中で考える必要もあると説いている(福田 2003, 49-50)。グローバル化や過度の商業化の進展により没個性化する地域もあるが、アベジャネダ博物館のように地域の記憶を刻印する顕彰として、記憶の景観を表象する場所もあるのは確かである。こうした個性が表象する場所にとって、過去の記憶の顕彰も重要であろうが、それを生きた歴史として現在まで継承する地域コミュニティの存在と活動といった地域の主体性も重要である。さらにこの場所に対してまなざしを向ける他者、例えばビスカヤ県やバスク州政府の存在と、それらと場所との関係といった場所にまつわる客観性も重要である。このように場所の主体性や客観性、主体や環境に対するまなざしにより生産されるのが、アベジャネダの自治の記憶の景観なのであろう。

6. おわりに

現在のアベジャネダは、ビスカヤ県エンカルタシオネス郡の基礎自治体ソプエルタに帰属する一地区で、自治体の行政中心地でもなく、そこに住む人口はわずかである。しかしその場所に刻まれた地域の人々の記憶は深遠で、エンカルタシオネスの地名が登場した10世紀からわずか2世紀後には郡の行政中心として機能するようになった歴史がその原点である。それ以降、約400年続いた自治の記憶は、生きた歴史としてその場所に刻印され、現在は博物館として残る建造物群の景観に表象する。

アベジャネダスは、エンカルタシオネス郡の各地を代表する代議員が集まり、地域の自治をめぐる議論が展開された一種のアリーナであった。中世から近世まで続いた自治体制は19世紀はじめに一旦幕を閉じるが、自治の議論の場であった塔建築は20世紀には博物館としてよみがえり、建築家、自治体などが改修や用途をめぐる議論を展開した。そして20世紀末以降、地域博物館としての性格を強め、展示者、展示物、見学者の間で地域をめぐる交流が興っている。果たす役割が行政から展示へ変化したものの、地域のアリーナであり続けたことにはかわりない。

Cameron (1974) は、博物館をアリーナに通じる表現で「フォーラム」とであると説明した。人々が展示物を拝みに来る寺院のような場所ではなく、未知なるものに出会い、そこから議論が始まる場所という意味である。現在、世界各地の博物館はフォーラムとしての性格をますます強めつつあり、エンカルタシオネス博物館もその例外ではない。展示する側、展示される側の協働はますます深化し、展示を観る側の利用者も巻き込んで、博物館活動は活発化している。地域のフエロ体制の象徴としての場所が、フエロをめぐる自治の記憶を展示し、展示され、まなざしが注がれる場所として現在も生きていることの意義は計り知れない。そ

もそもフエロの語源は、ラテン語で広場を意味するフォルム forum にあり (García-Gallo de Diego 1956, 388-9)、奇しくもフォーラムと語源を共有する。かつて地域をめぐる自治の議論が展開された場所において、現在では自治の記憶を継承する地域の展示についての議論が展開されているのである。形は変えながらも継承される地域をめぐる議論の場所、これこそが記憶の場所としてのアベジャネダであり、そこで現在も展開される地域をめぐる議論の景観こそが、アベジャネダの記憶の景観といえよう。

謝辞

本稿は日本学術振興会・科学研究費補助金基盤研究 (C) 「グローバル化時代のバスク・ナショナリズムに関する政治地理学的研究」(研究代表者: 石井久生 課題番号 19K01190) による成果の一部である。現地調査にあたり、エンカルタシオネス博物館やビスカヤ県文化局の皆様には貴重な資料をご提供いただいた。ここに記して御礼申し上げます。

〈注〉

- 1) カスティーリャ語でフエロ (fuero)、バスク語でフォル (foru) と呼ばれ、日本語では「地域特権」や「地域特殊法」などと訳されるが、本稿では現地で最も普及している呼称である「フエロ」と表記する。
- 2) アベジャネダはカスティーリャ語で Avellaneda と表記されるが、本稿では特段の歴史的文書などに関わる記述を除いてバスク語表記の Abellandeda を使用する。
- 3) Tierra Llana は、カスティーリャ語で「平地」あるいは「肥沃な土地」を意味し、後のビスカヤ領主国の中心領域で、後に6つの郡 (Busturia, Marquina, Zornoza, Uribe, Arratia, Bedia) から構成されるようになる。市壁で囲まれていない土地、すなわち農村地域を意味し、市壁を持つ都市とは異なる扱いであった。日本語の適当な訳語がないので、本稿ではカスティーリャ語の発音通り「ティエラ・ジャナ」と表記する。
- 4) 中世末のエンカルタシオネスは、5つの valle (Carranza, Trucíos, Arcentales, Gordejuela, Somorrostro [6つの concejo (Musquiz, Abanto, Ciervana, Santurce, San Salvador del Valle, Sestao) により構成される]), 4つの concejo (Gueñes, Zalla, Sopuerta, Galdames), 3つの villa (Lanestosa, Balmaseda, Portugalete) の統治体が存在する複雑な領域であった (Arizaga and Martínez 2008, 161)。valle とはカスティーリャ語で「谷」を意味し、河谷沿いに形成された集落にこの称号が与えられた。villa は「街」に相当し、領主から自治の特権を与えられるが、ciudad すなわち「都市」より下位のランクに位置した。villa 街や ciudad 都市は市壁に囲まれていた。concejo は一定範囲の領域の内部に散在する集落に与えられる呼称で、ciudad や villa より下位の統治体ある。
- 5) ティエラ・ジャナにおいて代議権を保持していたのは、地域内の72の集落であったが、この付近では教会前で地域の決まり事を合議で決めていたため、これらの集落の議席は anteiglesia アンティグレシアと呼ばれた。アンティグレシアとは「教会の前」を意味し、教会の扉の前に住民が集まって合議したことに由来する。21の都市の内訳は、「街」あるいは「小都市」に該当する villa の称号を領主から与えられた20の集落、「都市」を意味する ciudad の称号を持つ1都市 (Orduña オルドゥニャのみ) で構成された。当初エンカルタシオネス郡は1議席、ドゥランガルデア郡は2議席であったが、後に増員された。

- 6) Arizaga and Martínez (2008) が、エンカルタシオネス各地のフェロについて、3つの villa (小都市) であるバルマセダが1199年に、ラネストサが1287年に、ポルトゥガレテが1322年に、ビスカヤ領主からログローニョのフェロを与えられたと記していることから、ログローニョのフェロが各地の自治に影響を与えたことは間違いない。
- 7) 1806年12月6日、スペイン王室はエンカルタシオ郡をビスカヤ領主国に正式に編入する王令を発布し、アベジャネダ評議会の機能もこれで停止した (Martínez 2008, 252)。
- 8) 1394年に編纂されたフェロの一部に「集合する慣例に従って、アベジャネダ評議会において全員集合する」という記述があるので、1394年以前から地域の合議のための集会が開催されていた可能性が高い。
- 9) バンデリソ bandelizo の戦い、またはバンダ banda の戦いといわれるが、バンダとは「一団」を意味し、中世のイベリア半島に存在した土着の貴族であるイダルゴ hidalgo とその家系一族 linaje、それらを中心に結束した集団をこのように称した。
- 10) Goicoechea (2015, 119-120) は、こうした防衛目的に特化した塔は沿岸防衛のためにも建設されたため、バスク地方の西のカンタブリア、アストゥリアス、ガリシアのカンタブリア海沿岸地域にも多く見られるとしている。
- 11) Vilella (2016, 81) は、マドリード図書館所蔵の17世紀の『諸家系譜 *Genealogía de Varias Casas*』を引用して、当時のアベジャネダ家はバスク地方ではなくガリシア地方の出身であると指摘している。アベジャネダの塔には1401年から郡の行政や司法を司る地方行政間の副長官クラスの役人が居住しており、アベジャネダが当時のエンカルタシオネス郡の行政中心地域であったことは間違いない。その役職をアベジャネダ家が担った。この家系は、この地域の有力家であるサラサル Salazar 家、バルマセダ Valmaseda 家、メンドサ Mendoza 家などと婚姻関係で結ばれていた。
- 12) 逆にカスティーリャ王家の支配のもと、地元有力家が建設した塔が戦乱により破壊されるケースも出てきたが、カスティーリャ王国のイサベル女王とアラゴン連合王国のフェルナンド二世の成婚により王権が安定した15世紀末には、バンデリソの戦いも収束し、塔の破壊も収まった (Goicoechea 2015, 144-146)。
- 13) Carranza, Gordejuela, Trucíos, Arcenales, Güeñes, Zalla, Galdames, Sopuerta の8地域から代議員各1名と、Valle de Somorrostro から代議員2名 (San Jorge de Santurce, San Salvador de Valle, Sestao の3地区の代表1名, Ciérvana, Abanto de Suso, Abanto de Yuso, Musques の4地区の代表1名) が参加した (Martínez 2008, 224)。
- 14) 引用の原典は、Delmas, Juan Bautista Eustaquio (1864). *Guía histórico-descriptiva del viajero en el Señorío de Vizcaya*. Bilbao: Imprenta y litografía de Juan E. Delmas.
- 15) バスク州の資料 (Departamento de Cultura y Política Lingüística 2019, 5) によれば、2018年時点で州内に100の博物館・美術館が存在するが、そのうち1950年以前に開館したものは11しかなく、1934年開館の同博物館は最古の部類に入るであろう。
- 16) 『アベジャネダ議事堂特別計画』(Muñoz 1991) によれば、それ以前に議事堂修復を主導した建築家は Antonio Carlevaris (1899-), Diego Basterra (1923-, 1931-), Manuel Galíndez (1925-), Gonzalo Cárdenas (1939-) らであった。
- 17) Desvallées and Mairesse (2010, 88) によれば、博物館が人々との間に構築を望む特定のつながりを強調することを目的として、「社会博物館 social museum」と「コミュニティ博物館 community museum」という2種類の博物館が近年発展してきた。これらの博物館は、伝統的に「民族学博物館 ethnographic museum」の範疇に入るが、それとの違いは、前2者には人々との間に強い絆があり、その業務の中心に人々がいることにある。コミュニティ博物館の運営は、社会博物館の動きの一部で

ある場合もあるが、それらが表象し、またそれらを維持しなければならない社会的、文化的、職能的、または地理的な集団とより直接的に結びついている。地理的な集団との関係が特に密接な場合が、「地域博物館 local museum」に該当するのであろう。したがって本稿では、local museumの訳語に「地方博物館」を当てることとする。しかし Desvallées and Mairesse (2010, 88) は、「地域博物館」に対応する用語に neighbourhood museum を充てている。本稿ではこちらに「近隣博物館」の訳語を充てることとする。近隣博物館はエコミュージアムとともに近年注目されるようになった博物館の新しい形態で、社会的な博物館の形態をとるものの、地域のイニシアティブだけ、あるいは「思いやりの心」に頼って運営される博物館が neighbourhood museum と定義できる (Desvallées and Mairesse 2010, 88)。こうした博物館ではコミュニティの機能とアイデンティティに直接関わる問題が取り扱われ、地域博物館の性格と類似するものの、博物館が扱う地域の範囲は小規模な近隣地区 neighbourhood の単位となるうえ、地域住民の博物館運営への参加度も異なることから、本稿では「地域博物館」と「近隣博物館」を使い分ける。

- 18) 10の展示室の展示テーマは次のようになっている。①先史時代Ⅰ (32000-3200BC)、②先史時代Ⅱ (3200-25BC)、③ローマ化、④中世初期、⑤都市の創設 (12-14世紀)、⑥中世後期、⑦自治制度 (1394-1801)、⑧近世の経済、⑩近世の社会と芸術。

参考文献

- 石井久生 (2013). 「制度により構築される言語景観——バスク州とナバラ州における基礎自治体改名の実践」『共立国際研究』30 : 39-61.
- 石井久生 (2011). 「バスク自治州にみるボーダーランドの言語景観——基礎自治体名称バスク語化の事例から」山下清海編『現代のエスニック社会を探る——理論からフィールドへ』学文社, pp. 147-167.
- 石井久生 (2008). 「ナバラ自治州のバスク語話者——住民と制度の交差する言語空間」『共立国際研究』25 : 65-93.
- 金子 淳 (2019). 「博物館における場所性とオーセンティシティ」『桜美林論考：人文研究』10 : 67-80.
- 武井二葉 (2020). 「地域博物館における「地域」の表象」『博物館学雑誌』45(2) : 1-14.
- 福田珠巳 (2003). 「異質性と均質性の間で——「地域」再考ノート」『大阪府立大学紀要 人文・社会科学編』50 : 47-56.
- 若林幹夫 (2009). 「郊外、ニュータウンと地域の記憶——集合的記憶の都市社会学試論」『日本都市社会学年報』27 : 1-19.
- Alderman, D. (2002). "School Names as Cultural Arenas: The Naming of U.S. Public Schools after Martin Luther King, Jr.," *Urban Geography* 23(7): 601-626.
- Alaminos López, E. (1997). "Los museos locales y el Museo Municipal de Madrid: Aproximación a la historia de su formación," *Boletín de la ANABAD* 47(2): 115-156.
- Antoñanzas Cristóbal, M. (1996). "Un proyecto renovado para un nuevo museo," In M. Antonanzas and J. González (Eds.), *Enkarterrietako Museoa/Museo de las Encartaciones*. Bizkaiko Batzar Nagusiak, pp. 31-41.
- Bañales García, G. (Ed.) (2022). *Encartaciones. Documentos para su historia y de las casas solares Aiara, Velasco, Salazar y Bañales. 1297-1821*. Museo de las Encartaciones/Diputación Foral de Bizkaia.
- Basik, S. (2023). "Vernacular Place Name as a Cultural Arena of Urban Place-making and Symbolic Resistance in Minsk, Belarus," *Urban Geography* 44(8): 1825-1832.
- Arizaga Bolumburu, B. and S. Martínez Martínez (2008). "Las Encartaciones de la Edad Media," *Iura Vasconiae: Revista de Derecho Histórico y Autonómico de Vasconia* 5: 157-188.

- Barrero García, A. (2008). "Los Fueros de las Encartaciones y otros fueros contemporáneos," *Iura Vasconiae: Revista de Derecho Histórico y Autonomico de Vasconia* 5: 103-152.
- Brown, K and F. Mairesse (2018). "The Definition of the Museum through its Social Role," *The Museum Journal* 61(4): 525-539.
- Burk, A. (2006). "Beneath and Before: Continuums of Publicness in Public Art," *Social & Cultural Geography* 7: 949-964.
- Cameron, D. (1974). "The Museum: A Temple or the Forum," *Journal of World History* 4(1): 189-202.
- Cava Mesa, M. (1996). *Memoria colectiva del bombardeo de Gernika*. Bakeaz.
- Departamento de Cultura y Política Lingüística (2019). *Informe estadístico: Museos y colecciones de la comunidad autónoma de Euskadi 2008-2018*. Eusko Jaurlaritzaren Argitalpen Zerbitzu Nagusia.
- Desvallées, A. and F. Mairesse (Eds.) (2010). *Key Concepts of Museology*. Armand Colin. (井上由佳・太田 歩・大西 舞・栗原祐司・白原由起子・邱 君妮・藤田千織・水嶋英治・藁谷祐子訳 (2010). 『博物館学のキーコンセプト』)
- Dacosta, A. (1997). El hierro y los linajes de Vizcaya en el siglo XV: Fuentes de renta y competencia económica," *Studia Historica Historia Medieval* 15(15): 69-102.
- Duncan, J. (1990). *The City as Text: The Politics of Landscape Interpretation in Kandyan Kingdom*. Cambridge University Press.
- Duncan, J. and N. Duncan (1988). "(Re) Reading the Landscape," *Environment and Planning D* 6: 117-126.
- Dwyer, O. and D. Alderman (2008). "Memorial Landscapes: Analytic Questions and Metaphors," *GeoJournal* 73(3): 165-178.
- García-Gallo de Diego, A. (1956). "Aportación al estudio de los fueros," *Anuario de historia del derecho español* 26: 387-446.
- Goicoechea de la Quadra-Salcedo, M. de (2015). *La influencia de los sistemas constructivos de las torres banderizas en la arquitectura del caserío en la provincia de Vizcaya*. Doctoral dissertation, Escuela Técnica Superior de Arquitectura, Universidad Politécnica de Madrid, Retrieved from <https://doi.org/10.20868/UPM.thesis.42875>.
- Gómez Gómez, A. (2003). "La arquitectura neovasca y su aportación a las viviendas de casas baratas," *Zainak: Cuadernos de antropología-etnografía* 23: 351-376.
- González Cembellín, J. (1994). "Abellanedako batzar-etxea/La casa de Juntas de Abellaneda," In M. Antonanzas and J. González (Eds.), *Enkarterrietako Museoa/Museo de las Encartaciones*. Bizkaiko Batzar Nagusiak, pp. 9-19.
- González Cembellín, J. (2004). *Torres de las Encartaciones*. Diputación Floral de Bizkaia.
- González Cembellín, J. (2008). "Génesis de Juntas de Avellaneda," *Iura Vasconiae: Revista de Derecho Histórico y Autonomico de Vasconia* 5: 201-220.
- Halbwachs, M. (1925). *Les Cadres sociaux de la mémoire*. Félix Alcan.
- Halbwachs, M. (2017 [1945]). *La topographie légendaire des Évangiles en Terre Sainte: Etude de mémoire collective*. Presses Universitaires de France.
- Inal, B. (2020). "Gernika/Guernica como lugar de memoria en los textos literarios," In M. Chihaiia and U. Hennigfeld (Eds.), *Guernica entre icono y mito: Productividad y presencia de memorias*. Iberoamericana-Verueto, pp. 135-163.
- Juntas Generals de Bizkaia (1991). *Acondicionamiento y ampliación de la Casa de Juntas de Abellaneda*:

- Proyecto básico*. Juntas Generals de Bizkaia.
- Martínez Rueda, F. (1996). *Abellanedako Batzar Nagusiak*. Bizkaiko Batzar Nagusiak.
- Martínez Rueda, F. (2008). "Las Juntas de Avellaneda en el Antiguo Régimen," *Iura Vasconiae: Revista de Derecho Histórico y Autonómico de Vasconia* 5: 221-256.
- Muñoz, Javier de (1991). *Plan especial Casa de Juntas de Avellaneda: Pulan puntual de las NN.SS. del municipio de Sopuerta, texto refundido*. Juntas Generales de Bizkaia.
- Orascoaga, F. de (1909). "Otros árboles históricos," *Boletín de la Comisión de Monumentos de Vizcaya*, 1(3): 52-59.
- Orella Unzué, José (1989). "El origen de las Juntas Generales de Álava, Bizkaia y Guipúzcoa," *Azpilcueta: Cuadernos de Derecho* 6: 133-180.
- Pérez, Rodríguez, E. (Ed.) (2008): *Atlas historikoa: Euskal Herria munduan*. Elkar.
- Raento, P. and C. Watson (2000). "Gernika, Guernica, Guernica? Contested Meanings of a Basque Place," *Political Geography* 19(6): 707-736.
- Relph, E. (1976). *Place and Placelessness*. Pion (高野岳彦・阿部 隆・石山美也子訳 (1991). 『場所の現象学——没場所性を越えて』 筑摩書房)
- Rose-Redwood, R. and D. Alderman (2008). "Collective Memory and the Politics of Urban Space: An Introduction," *GeoJournal* 73(3): 161-164.
- Russell, N. (2006). "Collective Memory before and after Halbwachs," *The French Review* 79(4): 792-804.
- Shahzad, F. (2012). "Collective Memories: A Complex Construction," *Memory Studies* 5(4): 378-391.
- Till, K. (2003). "Places of Memories," In J. Agnew, K. Mitchell, and G. Toal (Eds.). *A Companion to Political Geography*. Blackwell, pp. 289-301.
- Vasudevan, P. and W. Kearney (2016). "Remembering Kearneytown: Race, Place and Collective Memory in Collaborative Filmmaking," *Area* 48(4): 455-462.
- Vilella y Sánchez Viamonte, M. (2016). "El barrio de Avellaneda en Sopuerta y el fundador del linaje en el Río de la Plata," *Revista Genealogía Familiar* 9: 83-109.

The Formation of a Nation and the Landscape of Memory of Autonomous Experience in the Basque Country: A Case of Abellaneda in las Encartaciones County, Bizkaia

Ishii, Hisa

Abellaneda is a small town in the municipality of Sopuerta, las Encartaciones County of the province of Bizkaia. The town is not administrative center of the municipality nowadays, despite the importance as the place of memory for the local people. An origin of the place name of las Encartaciones dates back to the 10th century, and just after two centuries, Abellaneda began to take a roll of the administrative and the political center of the region, being held there an autonomous assembly composed by local representatives. The autonomous assembly “juntas generales”, maintained highly autonomous function by holding local legal system, called as “fuero”, and could prevent irrational intervention by the superior autonomous body, Lordship of Bizkaia. Abellaneda and las Encartaciones closed its autonomous history in the beginning of the 19th century by total incorporation to the Bizkaia. However, the tower house building, in which there was an assembly room, was transformed into a museum in 1934. From then on, Abellaneda has been a place that exhibits local history and takes over the memory of local people’s experience. It is deeply impressive that, in the place where local autonomy had practiced, local people currently discuss about the exhibitions and the establishment which represent the memory of autonomy even though the form has changed from assembly into museum. The memory of dialogues between local people from the medieval period to the present day has been engraved in the landscape of memory in Avellaneda.